

都市の廊下

内部的外部の揺らめきを用いた空間創造

指導教員 吉松秀樹教授 印

7AEB1109 浅野目裕介

1. 問題意識「廊下のような路地」

出っ張りに覆われた、廊下のような路地空間に魅力を感じた。その空間は家屋の廊下を思わせる質感や寸法を持ち、住居間にまとまりを生み出していた (fig.1)。



fig.1 廊下空間の比較

2. 調査「内外の認識」

都市の廊下は、外部であるにもかかわらず途切れ途切れに内部の表情を感じさせるものである。出っ張りが断続して現れることで、様々な内外の認識が生まれている (fig.2)。

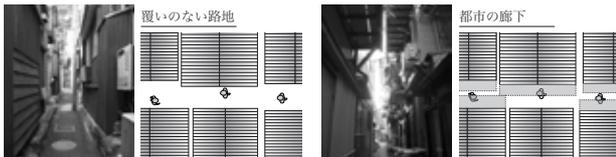


fig.2 路地における内外の認識の違い

都市では「内」「外」の他に「内部のような外部」「外部のような内部」など様々な内外の認識があふれている。これら内外の認識は、主体が動くことで揺らめいているように感じるものであった (fig.3)。



fig.3 様々な内外の認識

3. 分析「内部的外部がゆらめく路地」

広尾の路地は屈折しているため面が現れて包まれているように感じる (fig.4)。また断続的に現れる出っ張りによって、内部のように感じる度合いが変化し、内部的外部が揺らめく路地空間をつくりだしていると言える (fig.5)。

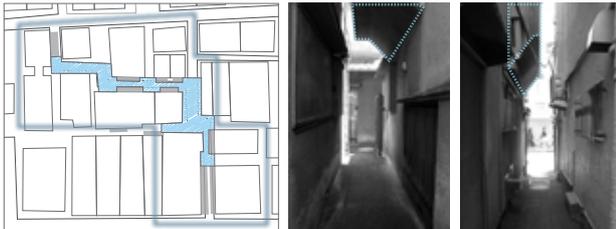
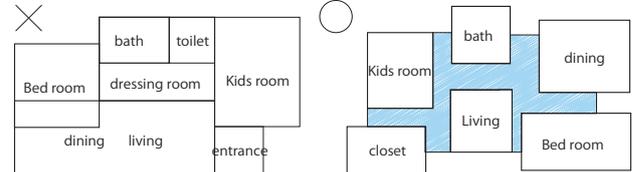


fig.4 平面的に内部を感じさせる要素

fig.5 断面的に内部を感じさせる要素

4. 提案

都市の廊下を用いて二世帯分棟住宅を設計する。内部的外部が揺らめく廊下を中心にプログラムを配置することで (fig.6)、「内部と外部の距離」「世帯間の距離」を縮めることを目的とした。都市の延長として機能することで、廊下は多様な表情を見せる (fig.7) (fig.8) (fig.9)。



主役となる部屋を中心にプログラムをつくるのではなく・・・

廊下状の空間を中心にプログラムを配置する

fig.6 ゾーニング



fig.7 模型写真



fig.8 plan



fig.9 section